



TITLE:

琉球を守護する神

AUTHOR(S):

原田, 禹雄

CITATION:

原田, 禹雄. 琉球を守護する神. 人文學報 2002, 86: 191-211

ISSUE DATE:

2002-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/48582>

RIGHT:

琉球を守護する神

原 田 禹 雄

- | | |
|---------------|---------------|
| 1. はじめに | 7. 斗 姥 |
| 2. 辨戈天から弁才天女へ | 8. 阿修羅 |
| 3. 琉球神道記 | 9. 羅睺星 |
| 4. 弁才天女勧請 | 10. 三 鏡 |
| 5. 弁才天の儀軌 | 11. 聞得大君御殿の神像 |
| 6. 三面六臂の弁才天 | 12. 結 語 |

1. は じ め に

明と清の歴代の冊封琉球使録から、これら使臣が琉球を守護する神をどのように理解したのかを検索し、それに関連する事項について、きわめて自由に検討を加えてみたい。

引用文献は、必要と考えられるもののほかは、すべて大意だけをあげた。そのまま引用するものも、ひらがなを用い、現代風仮名づかいとした。弁才天の書き方は、さまざまであるが、必要と考えられるものは原典通りとしたが、その他はすべて便宜上、弁才天と書くことにした。

2. 辨戈天から弁才天女へ

琉球の冊封使録を最初に著したのは、尚清の冊封使の陳侃である。陳侃とそれ以後の冊封琉球使の使録から、琉球を守護する神に関する記載をあげる。

陳侃は『使琉球録¹⁾』で次のように記す。

人々は神を恐れている。神はすべて婦人を^{よりまし}戸とするが、再婚した者は戸とはしない。王府に祭事があれば、神が集まり、王は世子と陪臣を従えて稽首する。国によからぬことをたくらむ者があれば、神は王に告げ、王はこの者を捕縛する。昔、中山王を害そうとした倭寇がいたが、神は、舟を動けなくし、水を塩にかえ、米を砂に変えたので、そのまま捕らえられた。これぞ、この地を守護するものと考えられる。戸となる女を女君といい、

上にたつものから従うものまで、三百ないし五百人ほど、縦に並び、草のかぶりものをいただし、木の枝を手にとり、馬にのるもの、徒歩のものもあり、王宮に入って神あそびをする。ひとりがうたいだすと、みながそれに唱和し、そのうたう声は悲哀にみちている。不意に来て、不意に去る。

同様の記述は、郭汝霖²⁾、蕭崇業³⁾へと引きつがれてゆくが、夏子陽の『使琉球録⁴⁾』は、その時代的背景を反映してか、かなり緊迫したものとなる。

国内では神を敬う。神として女王がおり、王室の姉妹の人々が、代々、神によって選ばれて女王に就任する。五穀がみのもと、女王が久高島へ渡り、みのった数穂を噛む。各地ではそれから収穫をはじめ。女王が口にせぬうちに、収穫をして食べる者があれば、たちどころに死ぬ。

琉球には城池がなく、人々は戦闘の訓練もうけていない。隣国の日本は悪がしこく、たびたび侵略しようとしているのに、それを全く無視して、代々、おちついたものである。(中国に) 聖天子がおわしまし、その傘の下にいないければ、属国たるもの、代々、帯砺を守って安んじておれようか。

今年の九月、日本の船若干が来そうだと、属島から報告があった。法司官にたずねると「何年もそんなことを言っておりますが、まだはっきりしてはおりません。この国には靈験いやちこな神がおわしまし、神におまかせすれば心配はありますまい」とのことであった。日本には油断がないので、備えをすべきだと思い、すこし画策して、法司官らに兵を選ばせ、武器をみがいて準備させた。随行してきた鉄匠に堅固な武器を準備させて、防御用とした。こちらに備えのあるのがわかれば、日本もその気は起こさなくなるであろう。それで、この国の人は深く私を徳とし、禍いを未然に防いだとした。

琉球は強いと記録されてきた。海の島で孤立しておれば、必ず強いということになろう。来てみれば、そうでもないのである。何によって守るのかとたずねると「陰と神とをたのんでおります」とのこと。陰はたのむに足りようか。神もまた必ずこちらの側についてくれようか。(中国の) 天子の朝廷にたよらねば、山川の神も助けてくれようか。

夏子陽の心配は、その三年ののち現実のものとなった。1609年、薩摩から島津勢三千余人が琉球をほしいまに侵略した。陰も神も、聞得大君も三十三君も、何のたのみにもならな

かった。清朝の冊封使の汪楫は『使琉球雜録⁵⁾』でこう記述する。（図1，2）

伝聞したところ、国に六臂の女神を祀っている。手に日と月を執り、^{べんか}辦戈天と名づけている。靈驗は特にあらたかである。婦人で再婚しない者を^{よりまし}尸とする。尸を女君という。王と世子と陪臣たちは、みな稽首する。国に不良の者がおれば、神は王に告げて捕らえさせる。隣国が侵略すると、神は水を塩に変え、米を砂に変えてしまうので、去ってしまう。明の使臣の某が、この国にきて王と歓談したとき「国に城はなく武器は少ないが、敵をどうして防ぐのか」とたずねた。王はつぶさに女神の靈驗を話し「おまかせしておけば心配はありますまい」と言った。使臣は「たまたま神がまします、その時靈力がなければ、何にまかせるのか」と言った。その後、突然日本が来て、ほしいままに人を殺し物をかすめた。王と王相を捕らえてつれてゆき、久しいのちに釈放した。王は「神の靈は、遂に天使の一言のためにやぶられたのか」と言って、その後、^{べんか}辦戈天を口にしなくなったとのことである。今まで見た寺院にもまた、辦戈天を祀っている所はなかった。

徐葆光の『中山伝信録⁶⁾』に、円覚寺の弁才天女堂の記述がある。

池のまんなかに堂があり、観蓮橋がかかっている。弁才天女が祀られているので天女堂といい、池は円鑑池とも弁才天池ともよぶ。弁才天女というのは、中国の^{とほ}斗姥のことである。

多分、琉球の人々が案内して、言うがままに書いたのであろう。

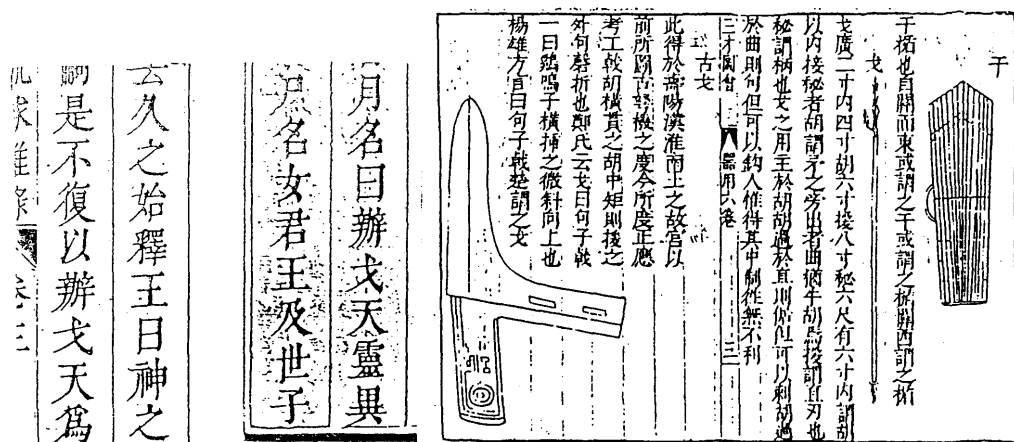


図1 汪楫『使琉球雜録』弁ザイ天ではなく弁カ天である

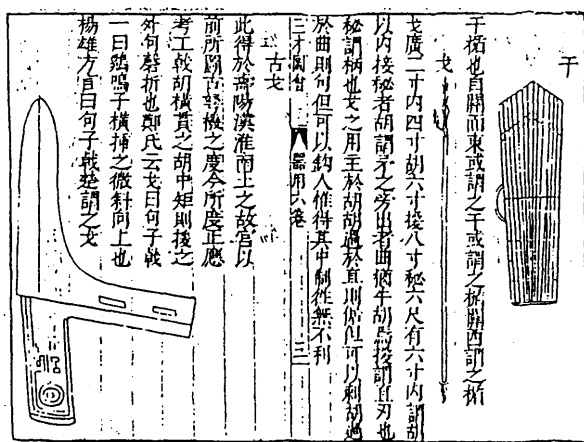


図2 『三才図会』の戈

ここで、汪楫のいう^{べんか}辦戈天と、徐葆光の書いた弁才天女という二つの神が、琉球に存在することとなった。

次使の周煌は『琉球国志略⁷⁾』の「祠廟」の円覚寺の所では、徐葆光と同じ記述をそのままくりかえすが、「志余」で、こう記している。

考察するに、天使館の後方の善興寺の右に天満神があり、天孫氏^{むすめ}の女を祀る処であるといわれている。円鑑池の天女堂は弁才天女といわれているが「戈」の字は、おそらく「才」の字のあやまりで、「天」の字の下に「女」の字を加えたものであろう。

すこぶる難解な考察であるが、これは、同書の「祠廟」の善興寺の項の、

仏堂には、不動明王とともに三首六臂の天孫神が祀られている。

土塀の外は、五六畝を石垣でかこって、中に一板閣を建てて、天満大自在天神を祀り、戸に錠をかけて開けられない。

の文章をうけていると考えられる。天満宮と天孫神とは関係がないが、三首六臂の女神から、周煌は汪楫のいう^{べんか}辦戈天をそれに擬したのである。

李鼎元の『使琉球記⁸⁾』の嘉慶五年八月十六日の記事に、

介山とともに円覚寺に遊んだ。観蓮橋を渡ると、堂に^{べんか}辦才天女がまつられている。斗姥のことである。

とあり、九月二十九日には、

二十九日戊申、雨。弁才廟を遊覧した。廟はあれはてていたが、弁才天女を祀ってある。通事というには、神は昔は靈驗あらたかで、^{べんか}辦戈天といていた。水を塩に、米を砂に変えることができ、外敵を防いでいた。某天使の一言で靈力が破られ、遂に靈驗はなくなった。その後、改めて弁才天女と名づけた。しかし、この国の人は今もなお、あがめたてまつりつつしんでいる。人によると、天孫の娘とも、君々ともいっている。

とある。この九月二十九日に行った弁才廟は、円覚寺とは思えない。雨の日に、わざわざ首里

へ出かけるとは思われない。天使館のすぐ近くの内兼久山の弁才天堂であろう。周煌の「志余」を読んでいた李鼎元が、恐らく、琉球を守る神は、^{べんか}辨戈天なのか、それとも弁才天女なのか、と通事にたずねたのであろう。通事の言葉は、「窮余の御名答」の趣がある。

3. 琉球神道記

夏子陽の渡琉とほとんど時を同じうして、日本の浄土宗名越派の僧の袋中が、琉球へわたった。尚寧の厚い帰依をうけたが、日本へ帰って『琉球神道記⁹⁾』を著した。関連する記述をみよう。カタカナの部分の原文は梵字である。

昔、此国の初、未だ人あらざる時、天より男女二人下りし。男をシネリキユと、女をアマミキユと云う。二人舎を並べて居す。

二人、陰陽和合は無けれども、居所並ぶが故に、往来の風を縁じて、女胎む。遂に三子を生ず。^{ひと}一りは所々の主の始なり。^{ふた}二りは祝の始。^{みだ}三りは土民の始。時に国に火なし。龍宮より是を求めて、国成就し、人間生長して、守護の神現じ給う。キンマモンと称し上つる。此神、海底を宮とす。毎月出て託あり。所々の^{おがみばやし}拝林に遊び給う。持物は御萱なり。^{うた}唱は御唄なり。竺土の唄の如し。

国に悪心貶毀の者あれば、必ず是を刑罰す。誹謀の者をば口を裂き、悪心は胸を切り、執りも狎れざる女性等、^{むげき}鉦戟のふるまい猶お勇し。所作の悪業、一一に^{そら}誣に宣べて責め給う。当人^{あらそ}諍うべき様なし。若くは、遠嶋の者をば、早舟して呼びめす。或いは又、悪心の者、常に毒蛇の攻あり。信者は見ることなし。況や傷害をや。託女三十三人は皆以って王家也。妃も其の一つなり。聞補君を長とす。^{すべ}都て君と称す。此の外、夷中^{いなか}辺土の託女は、数も定まりなし。家をも^た起てず。キンマモンに、陰陽の二神あり。天より下り給う、ギライカナイのキンマモンと称す。海より上り給うを、オボツカグラのキンマモンと称す。^{すべ}都て弁才天なり。古今の事、神託に明らかなり。若し、神慮^も囁り給う時は、諸人、^{いか}腕折、^{うでおり}爪折して、是を^お拝し^{たてま}慰め上つる。国の風として、岳岳浦浦の大石大樹、皆御神に^{あが}崇め上る。然して、^{とうと}拝み貴べば則ち驗あり矣。

ここには、島津侵略以前の琉球の守護の神が神々しく語られている。キミマモノは固有名詞ではない。察度の神号の^{うふまもの}大真物、武寧^{なかの}中之真物、思紹^{きし}の君志真物、尚巴志^{せじ}の勢治高真物^{たかまもの}をみると、人よりもすぐれた能力をもつものは、マモノである。女君をして女君たらしめる霊力そのものがキミマモノであろう。キミマモノの本地が弁才天であるという記述は、袋中が琉球の

人からきいたことなのであるのか、または、琉球の人の信仰から袋中自身が弁才天としたのかは、明らかではない。ともあれ、弁才天、キミマモノ、聞得大君がここでひとつのものとして習合して、琉球の神道が示された。

この神道は、島津の侵略ののちも、冊封使録に書かれているように、簡単に滅びたとは考えられない。いな、むしろそれを契機として、新たにかきたてられた動きもあった。識名親方盛命の『思出草¹⁰⁾』という擬古文集のなかに、「辨財天女を祭り奉りし言葉」の一文があって、九月七日の弁才天講を描写している。

此天女、仏ませし世に宇賀神王と現じ給い、信教の者には福田を施し、一切の魔土を退け、二世の願をみたし、怨敵を平らげ、愛敬を得せしめ給わんとの誓いをなし給う。久遠の昔は正法明如来と号して佛法擁護の為、衆生の貧を転じ、福を授け給い、また南方にましましては無量寿佛と号し、娑婆の世界にては如意輪観音となんきこえし。かかればこそ、わが琉球^{うるま}にも出で給いて、国を鎮護し、園比屋武^{そのひやむ}の嶽^{たき}、冕^{べん}の嶽^{たき}ちよう二つの御山に跡を垂れ給い、信心深き輩には、今も現形し拝まれ給うとなん。

去年、宿願とて、もろこし舟の便に御額一面（曹姥支天の文字あり）二句の聯を求めて二つの海をわたり来たり、今日しも是をかけ奉り、喜びにたえて

このときの琉球の弁才天は、完全に日本の宇賀弁才天であったことは、この一文で明らかである。中国へ発注した額に「辨財天」とは書かれなくて、「曹姥支天」と書かれていたのは面白い。曹姥支天の文字は、弁才天の原名の Sarasvati を中国風にアレンジしたものであろうが、徐葆光以後、弁才天は中国の斗姥であるとされている、その「姥」を共用しているのである。園比屋武御嶽と冕御嶽の神の本地が宇賀弁才天であることが、ここに明記されたことも注目される。二つの御嶽は琉球の王城鎮護の聖所なのである。

『混効験集¹¹⁾』の序の、

夫れ、我が朝は神国。御本地、辨財天なり。

の言葉や、『聞得大君御殿并御城御規式之御次第¹²⁾』（1875）の「聞得大君御殿毎日之御たかべ」の、

御火鉢の御すじ加那志前、金の御すじ加那志前、聞得大君加那志御すじ御神加那志前、弁財天加那志前。

という祈りをみると、琉球を守護する神と、その本地の弁才天は、聞得大君とともにつねにひとつのものであったと考えられる。明治の琉球処分によって、琉球国は解体され、聞得大君は尚家内の一存在となった。昭和九年、最後の聞得大君であった尚典夫人の野嵩御殿が、最後の被葬者として玉陵に葬られた。このとき、神も弁才天も、ともに神去ったのであろう。

4. 弁才天女勧請

琉球を守護する神の本地、弁才天女はしかし、単独に奉祀されることは少なく、公的に奉祀されたのは、尚寧の次に王位についた尚豊の代である。『琉球国由来記¹³⁾』（1713）の円覚寺の所に「肇創辦財天女堂記附再修事」がある。この文章は三部から成ると思われるので、三つに分けて全文をあげよう。

たず
原ぬるに、それこの地は、弘治十五年（1502）壬戌の間、朝鮮国王より方冊藏經をわが朝に献ぜられるや、始めてこの地を^{つく}として輪藏を創り、以て之を収めしなり。然るに万曆三十七年（1609）己酉に至りて、堂はまた老朽し、經もまた散失せり。而して^{ことごと}咸く空地と成れり。爾来、天啓元年（1621）辛酉に至って、尚豊王は円覚住持の恩叔に^{みことのり}詔して^{のたま}曰わく「朕聞けり、弁才天女は吾朝第一の守護神たりと。然りと雖も、昔より未だ^か曾って堂有らず。想うに、ここに經藏の遺址に於て、新たに一字の堂を構え、弁才天女の像を請じたてまつり、之を崇敬したてまつらんと欲す」と。恩叔は鞠躬として奏して曰さく「善き哉、大王。幸いに円覚の方丈に、^{もと}素より天女の像のおわしませり。之を請じたてまつるべし」と。よりてすなわち其の地に、続きて吏工はその力を展べて功は畢りを告げにき。是れ即ち像堂の世にあらわるる権輿なり。

以後、康熙二十年（1681）辛酉に至り、尚貞王は乗帰崇願して始めて行詣したまいしなり。因りて年々、正・五・九月、今に至るまで成式を絶やさざるなり。之に続きて、貴介公子・士庶人等、崇敬する者その^{いくばく}幾かを知らざるなり。毎年九月七日に至れば、弁才天講と称して、^{おのおの}各来りて祭ること、^{きながらおわ}宛然在しますが如きなり。年々、有司二員、祠事を奉じたてまつる者、之を講主と謂うなり。^い抑また古像を仰ぎたてまつるに、^{そもそも}支体分離して儼然たらず。^{かるがゆえ}故に、住僧の説三は明旨を奉じて、以て康熙二十五年（1686）に至り、新像を扶桑より請じたてまつりき。はしなくも、期年にして来光したまいしなり。時しも臘月の初七に^{なぬか}当りて、安置して開眼したてまつりき。古に云えり「神は人の崇敬に依りて威を増し、人は神の守護を以て運を添う」と。^{うべ}宜なるかな、深く信心を興せば、^{おこ}則ち像堂建立の功、また唐捐からずと云えり。

肇建以後、康熙五年（1666）丙午に至り、重修をなせりといえども、又、三十三年（1694）甲戌に至り、更に新たに之を創^{つく}りしなり。明年の夏、住僧蘭田、清聡を奉じて、池中に蓮を植えたりしなり。

第一部分は恩叔宗沢、第二部分は説三一玄、第三部分は蘭田智休の筆になるものと推測される。この文中に、島津勢の琉球侵略については何も語られてはいないが、万曆三十七年とは慶長十四年であって、まさしく島津勢の侵略の年である。島津侵略の年に、経蔵が老朽化し、大蔵経が散失し、ことごとく空地となったことで、その事情は歴然としている。

円覚寺二十二世の恩叔宗沢は、尚寧が薩摩の捕虜として連行されたとき、菊隠長老とともに尚寧に供奉した人である。同じく連行された、尚寧の弟の具志頭王子の尚宏が、駿府で病死したとき、佐敷王子の尚豊とともに、尚寧より先に琉球に帰国して、死んだ尚宏の菩提をとむらったのが恩叔なのである。

その後、尚豊は1616年に、十年の人質として薩摩に滞在したが、その年の冬に摂政に任命されて、琉球へ帰国することができた。その尚豊が、1621年に尚寧のあとをうけて王位について、まず最初にしたことが、薩摩勢によって見るかげもなくなった経蔵のあとに、弁才天女堂を建立することであった。弁才天こそは、琉球第一の守護神であるが、尚豊は一体、何か琉球国を守ろうとしたのかは、おのずと明らかであるように思われる。

円覚寺の円鑑池の弁才天女堂のほか、弁才天が勧請された事例はそれほど多くはない。『琉球国由来記¹³⁾』（1713）巻五の「西森ノ御イベ」下儀保村に、

順治十四年（1657）丁酉六月、馬氏国頭王子正則、辨財天宮一字を造立し奉る。源朝臣光久公の厄難消除を祈れば也。

とある。巻十二「前原之嶽」真壁村に、

神名 辨財天之御イベ

とある。『琉球国旧記¹³⁾』（1731）巻一の「唐栄記」の「内金宮森」に、次の記述がある。『由来記』にはこの記述はない。

山は高からずして秀雅、杜は大ならずして茂蔚す。その神を辨財天女と曰いて至昭至霊なり。禱れば必ず応ず。常に人民を守護し、不祥を呵禁して、名を世に知らるること久し。かるがゆえに古よりこのかた、四面石を築きて垣を作り、その地を封じて、以て崇信を為

す。万暦年間、日本の山城国の人に重温なる者あり。雲遊して球にあり。許願^{がんかけ}して数日ならずして塗^{みち}に一婦女に遇いて炬^{あたい}を買えり。値^{あがな}数錢を償いて、家に回りて之を觀るに即ち黄金なり。重温^{もと}、旧に依りて以て還えさんと欲して、更に携えて出づ。果して其の婦女に遇えり。婦女曰く、「吾は乃ち辨財天女なり。汝の志は嘉すべきなり。故に之を送る」と。遂に清風に化して見えざるなり。此に因りて重温は宮をその森の東に建てて、以て便ち恩を謝す。名づけて内金宮と曰う。後亦秀昌と重次ら、繼いで拝殿を建つ。今に至るまで鶴城の使者、必ず石燈^たを豎て、或いは金を発^{つか}わして宮殿を修葺す。康熙丁卯（1687）、盛海和尚、宮殿を改修し、以て堅牢と為せり。亦神像を請いて以て祀れり。

この地は、久米聖廟の後の森で、のちに県立図書館がおかれ、伊波普猷や真境名安興が勤務した所である。古くは寄上森とよばれ、内金宮嶽^{うきみやだけ}があって、重温が願をかけたのは、この御嶽であったと考えられる。鶴城は鶴丸城、つまり鹿児島城で、弁才天は歴代の在番奉行が奉祀する面をもっていたらしい。盛海は護国寺の住持である。勧請した弁才天女は、宇賀弁才天であったと推測される。

『琉球国旧記¹³⁾』巻九の「漲水嶽^{はるみずのうたき}」に、

太平山の公倉の前の海浜にあり。石を築きて圀^{つく}を為り、辨財天女を中に奉安したてまつる。今も求禱を致せり。

とある。宮古の開闢の神、戀角戀玉の靈所であるが、戀角が蛇身となって、隅屋の娘に三人の女の子を生ましめ、その三人の娘が宮古の守護神となったため、弁才天としたのであろう。宮古の人々は、漲水御嶽を弁才天とは考えてはいない。

『琉球国出来記¹³⁾』巻十一の「護国寺」に、

辨財天対面石（或いは腰掛石と名づく）。波上山門外の路上に、円い囲み石ありて、対面石と名づく。昔、日秀上人、七ヶ日毎夜、辨の嶽の辨財天に参らんと欲す。その次の夜より、辨財天の垂跡ましまして、石の上に立ちたまい、日秀上人と対面密契^{かるがゆえ}ましませり。故にその場を名づけて対面石と云う（石を囲みたりしは、順治子丑之年間、之を垣で囲む）。

とある。子丑というのは順治五年六年または十七年十八年をいっているのであろうか。

首里の末吉^{ぬんどんち}の祝女殿内の神屋に、弁才天の画像が祀られている¹⁴⁾。今は琵琶を抱いた弁才天であるが、戦前は、花の上に弁才天の座像を描き、下段の方に大勢の供衆が立っていたという。また、この画像は、弁才天堂と金武御殿の三ヶ所にあったという。

伊江殿内と小禄の照屋一門では、邸内に弁才天の画像をかかげて、弁才天講をしていた¹⁴⁾。
東恩納文庫の『八社縁起由来』は、明治になってからの覚書であろうが、弁才天の祠を次のようにあげている。

辨財天社 内金宮

祭神 市杵嶋姫神 十五王子

辨財天社 城嶽

祭神 同前

沖山三所大権現

箕之隅辨財天社

祭神 市杵嶋姫命 十五王子

辨財天社 硫黄城

祭神 同前

辨財天社 中渡地

祭神 同前

熊野三所権現が、琉球では広く祀られ、しかも、宮と神宮寺とが併設された例が多い。ところが、弁才天の祠堂は数も少なく、規模も小さい。

5. 弁才天の儀軌

ヒンドゥ教の女神サラスヴァティー Sarasvati が弁才天である。妙音天・大弁才天・弁才天女などと漢訳されている。弁財天は、後世の福神を示す文字であろう。サラスヴァティーは、初期アーリア人の故郷のブラフマーヴァルタ地域を流れる河で、その河の神が豊穡の女神として崇められ、更に弁舌の神ヴァーチ Vāc と習合して、弁舌・学問・知識・音楽の女神、ヴェーダの母、梵語、梵字の創造者とされた。このヒンドゥ教の女神が、仏教にもとりいれられ、わが国に弁才天信仰がおこった。

わが国の弁才天の儀軌¹⁵⁻¹⁷⁾は大きく分けて三つある。ひとつは、古い尊像で、奈良時代にはじまる。儀軌は『金光明最勝王経』にもとづく八臂の尊像で、

おのおの^く弓と^{せん}箭と^{とう}刀と^{ほう}稍と^ふ斧と、^{ちようしよ}長杵と鉄輪とならびに^じ網索を持す。

という形である。立像と坐像があるが、手に武器を執ることにかわりはない。(図3)

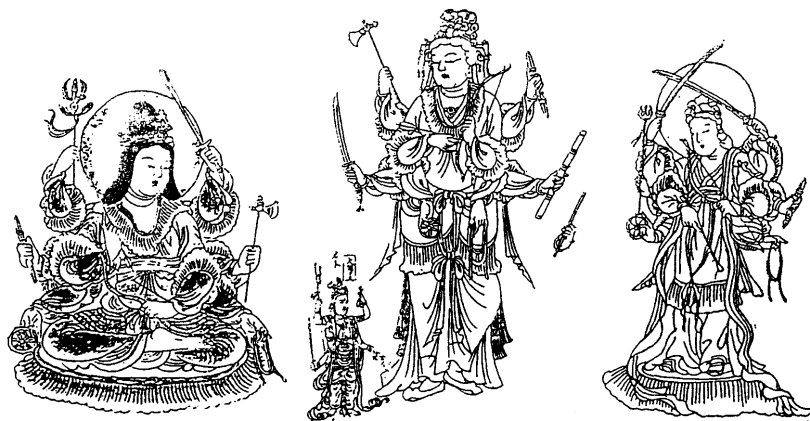


図3 『最勝王経』による八臂の弁才天像

いまひとつは、二臂で琵琶または箏篳を弾く女神像である。これは、平安時代になって、空海や円珍が請来した胎藏界曼荼羅などに描かれていたものである。胎藏界曼荼羅では、^{さいげいん}最外院に、天部や八部衆、九曜・二十八宿・十二宮などが描かれ、人々と最も近い存在でもあった。人々は、この最外院の諸尊に、現実的な欲望の成就を祈ろうとした。この論考とこの二臂像とは深い関係がないので、図をあげるにとどめる。原則的には、智慧・弁舌・音楽の祈りには二臂の像を、勝軍の祈りには八臂の像を本尊とするのであるが、その意味は述べるまでもあるまい。(図4)

三つめは、室町時代以後、わが国で広く信仰された宇賀弁才天である。儀軌は弁天五部経による。弁天五部経とはわが国の民俗経で、

- ① 『佛説最勝護国宇賀耶頓得如意宝珠陀羅尼経』
- ② 『佛説即身貧軫福德円満宇賀神将菩薩白蛇示現三日成就経』
- ③ 『佛説宇賀神王福德円満陀羅尼経』
- ④ 『佛説大字賀神功德弁財天経』
- ⑤ 『大辨才天女秘密陀羅尼経』

である。これらのうち、②は亀茲国の童寿の訳とされ、他の四経はすべて大広智不空の訳とされる。不空の弟子が恵果で、恵果から真言密教を伝授されたのが空海である。どのような人たちが、この五経を作りあげたのか、うかんで来るようである。



図4 二臂の弁才天像

①によれば、頭上に宝冠を頂き、冠の中に白蛇がおり、白蛇の頭は老人で、その眉は白い。八臂で、左の第一手から宝珠、宝鉞、輪宝、宝弓を、右の第一手から宝剣、宝棒、印鑰、宝箭を執る。頂に如意宝珠の円光がある。十五童子が従う。というのが宇賀弁才天の儀軌である。だが②では四臂で、左は如意珠・宝鉞、右は剣・宝棒を執る。宇賀弁才天は、宇賀神と弁才天とが習合したわが国特有の弁才天である。従って、弁天五部経もわが国で成立したということである。(図5)



図5 宇賀弁才天像（笹間良彦原図）

宇賀神は、①によれば、体は「白蛇の如く白玉の如し」とされる。宇賀の言葉は、字迦御魂^{うけもち}と通じ、保食の女神とも習合し、やがて稲荷の使や神とも習合した。宇賀の像は、首から上は老人で、体は白蛇である。それを俵の上においたり、蝦蟇^{がま}の像の上に安置して信仰した。その宇賀神が、弁才天の宝冠の上のにり、更に前に鳥居をそなえたのが、最も多い宇賀弁才天の尊像である。人面蛇体の宇賀神は、しかし、日本固有の神なのであろうか。白川静は『中国の神話¹⁸⁾』の中で、中国の銅鼓の文様に蛙のあることを指摘し、

蛙が鼓面にあるということは、埋蔵から掘り出されるときに、まずその蛙形が地上にあらわれるということである。蛙は冬に地下に眠り、春とともにめざめる。春耕のさきぶれともみられるのである。

新しく掘り出された銅鼓は、大地の生成力の蘇りを示す蛙が、その放射状の太陽の光の中で跳ねおどる形であられる。おそらくはそのとき、伏羲・女媧による大地の新たな造成、七十たび化すといわれる女媧の復活の儀式なども行われたことであろう。

と述べている。宇賀神をのせた蝦蟇は、この銅鼓の蛙であろう。伏羲も女媧も、ともに人面蛇身である。宇賀神の尊形の中に、苗族の稲作農耕の文化とのつながりを想像するのは、唐突なことであろうか。

デュメジルの「三機能体系」という神話理論は、わが国では吉田敦彦と大林太良によって研究が進められている。大林は『東アジアの王権神話』¹⁹⁾の中で、

武器と神との結びつきにおいても、弓矢と主権神、刀剣と戦士神、矛と豊穡神という結びつきは、このいわゆる三機能体系の一例として見ることができよう。

という。であるなら、弁才天は明らかに、一軀の中に、弓と矢、刀と斧、矛と杵とを執っている、三機能すべてを具現しているといえよう。大林はまた、同書で、

琉球王朝文化においては、内地の古代の三機能体系のうち、第二（戦士）機能の脱落と、主権機能の統治と祭祀への分裂という形による変形が神話と儀礼の両方において存在していたと考えられる。

という。これは、聞得大君をはじめとして君君と祝祝とが、外敵に対する戦士であったという冊封使録や『琉球神道記』の記述の読み落しであろう。主権は天孫氏とそれをうけた王統、戦士は君君と祝祝、豊穡は百姓という三機能が、琉球にも具備していたのである。

6. 三面六臂の弁才天

琉球の弁才天について、琉球側の資料ではその尊容をほとんど知り得ない。円覚寺の方丈にあって、尚豊の創建した弁才天女堂に移された像は、尚貞のとき「支体分離」したというから、かなり古い木像であったと思われる。尚貞が日本から勧請した新しい弁才天像は、その時代的背景からして宇賀弁才天であろう。末吉の祝女殿内の弁才天の画像と同様のものが、弁才天女堂と金武御殿にあったという話を信ずるならば、弁才天女堂にはいつの頃からか画像がかけられており、大勢の供衆がいたという点から、これを十五童子とみれば、疑いもなく宇賀弁才天であった。であれば、一面八臂の女神像であったはずである。毛起龍の『思出草』の弁才天講の本尊も宇賀弁才天である。

汪楫のいう「手に日と月を執る六臂の辨戈天」は、どこにあって、どこへ行ったのであろうか。汪楫は、神に関してはきわめて慎重な人であった。琉球に多いといわれた倭鬼を拝せぬために、聖廟であれ、天妃宮であれ、まず祀られているものの姿を自分の目でたしかめた上で、改めて礼拝した。波上宮では神殿をあけさせて、神体の金幣の裏側の文字まで読んでいる。従って、六臂の辨戈天は見えていないとしてよい。

六臂の神像は、周煌が渡琉したとき、善興寺で不動明王像とともに見ている。それまでも善興寺の記事は使録にあるが、六臂神の記述はない。雍正・乾隆間に善興寺に移されたのであろう。次使の李鼎元も『使琉球記』⁸⁾の五月二十八日に善興寺へ正使の趙文楷と遊んでいる。

佛堂は、ここもまた不動がまつられていた。そのほかにも神がまつられており、三面六臂で漆のように黒い。従官はこう言った。「これは、この国をひらいた天孫氏の神像でございます」。

同じ天孫神を、大田南畝が『琉球年代記』²⁰⁾ に図入りで紹介している。(図6)

又天孫氏と云うあり。三首六臂にして女神也。これぞ天神という神にしてシネリキュ・アマミキュの長女、クンクンなり。土俗あやまりて、これを辨才天と云うは、女神なればかくはなれるなり。像図の如し。

図をみると、三面六臂で手に日と月を執り、明らかに汪楫のいう辨戈天、琉球を守護する弁才天であったにちがいない。

7. 斗 姥

弁才天女堂の本尊を、徐葆光が斗姥^{とぼ}として以来、使録では斗姥と弁才天がひとつのものとされた。普通は斗母と書かれ、斗母元君ともよばれる道教の女神である。司命の神で大梵天に住んで、日・月・星辰を統治し、北斗星の母ともいわれる。一面八臂の神像で、衆生の難を救うときは、摩利支天となって救うといわれる。北京の白雲観の中に斗姥閣があり、泰山の中腹に斗母宮がある。昆明の龍泉観の斗母宮の写真をみると、一面八臂で左第一手に日、右第一手に月を執っている。

弁才天に、日と月とを手にする儀軌はない。強いてあげれば、『阿婆縛鈔』^{あきばしやう} 卷一五五の弁才天の絵である。左第一手は三鈷^{さんく}、第二手は日珠^{にしゆ}、第三手は弓、第四手は輪^{りん}を執り、右第一手



図6 太田南畝『琉球年代記』



図7 『阿婆縛鈔』の弁才天

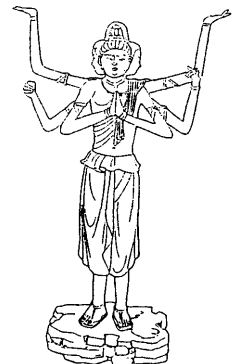


図8 三面六臂の阿修羅像

は剣，第二手は月珠稍，第三手は箭，第四手は羂索を執る。稍とはいえ，日と月とをシンボライズしたものである。これは、『最勝王經』大弁才天女品の，

或いは三戟を執りて頭に髻を円くし，左右に恒に日月の旗を持つ。

という頌の言葉を図像化したものであろう。（図7）

中国の斗母は，仏教の弁才天・摩利支天・観世音などから創出された道教の神であろう。密教に法成訳の『諸星母陀羅尼經』という，まるで斗母と双生児のような経典がある。悪星の障害を除く修法を九月白月七日より始めるように書いてある。その九月七日とは，弁才天講の日なのである。はたして偶然なのであろうか。弁才天と星とが関連があるのではないか。

8. 阿 修 羅

三面六臂ですぐ連想されるのは，興福寺の八部衆の阿修羅像である。かかげた図では，手には何も執ってはいないが，儀軌をみると，左右の第一手で合掌をし，左第二手に火頗胝^{かはてい}，第三手に刀杖，右第二手に水頗胝^{すいはいてい}，第三手に鎧を執る。火頗胝とは日，水頗胝とは月である。つまり，天孫神を阿修羅像といっても，それほど矛盾はない。しかし，阿修羅像を獨尊として祀った例は，私は知らない。（図8）

阿修羅は，『リグ・ヴェーダ』の中では，古代ペルシャの最高神アフラ・マツダと語源を同じくし，古代インドの善神であった。後に，阿修羅 Asura が非 A 天 Sura と理解され，悪神の要素を重ねた。インドの阿修羅の説話の多くは，日月との争い，帝釈との戦闘として，その色彩をそえている。

『法華經』序品に四阿修羅王をあげる。

四阿脩羅王あり。婆稚阿脩羅王・佉羅鷲駄阿脩羅王・毗摩質多羅阿脩羅王・羅睺阿脩羅王なり。各，若干百千の眷属と俱なり。

である。同経の法師功德品に，

諸の阿脩羅等，大海の辺に居在して

と，阿修羅が水と緑のあることを述べている。阿脩羅は，水のはとり，あるいは須彌山下の大海の底に住むというのが仏教の考えである。

河の精の女神サラスヴァティーが、戦闘神として八臂に武器を執るのは、アスラを滅ぼしたというインド神話に基づいている。水の領域での闘争があったのである。

9. 羅 睺 星

『法華經』は羅睺阿修羅王の名をあげた。羅睺は Rahu を漢字化したもので、日食と月食とを起こす悪魔の名である。ラーフは、不死の薬のアムリタを飲んでいてところを、ヴィシュヌ神に首を切られた。しかし、アムリタを飲んだ頭だけが不死となって、ヴィシュヌ神に告げ口をした日と月とをうらみ、これらをさまたげて日食と月食を起こすといわれた。この羅睺が、羅睺阿修羅王なのである。

『山家要略記』²¹⁾ に、羅睺阿修羅王が天女の裸体を見たいために、その手で日や月をさまたげるので、日食と月食が起こるのだと『正法念經』八をあげて説いているのは、このインド神話の流れをくむものであろう。

羅睺星と計都星は、宿曜道とも深いかわりがあるが、更に陰陽道にとりいれられて、八将神のうちの二神となる。羅睺星を黄幡神^{おうばんしん}といい、太歳神^{たいさいしん}の墓であるとされる。土をつかさどる凶神で、摩利支天とも習合する。計都星は豹尾神^{ひょうびしん}となえられる。矢野道雄は『密教占星術』²²⁾ に、インドでは、

- 一、羅睺^{ラーフ}が日月食を起こす魔物で、計都^{ケートウ}は彗星。
- 二、日月食を起こす魔物の頭が羅睺で、尾が計都。

という二つの見方があったことを述べている。一行禅師『梵天火羅九曜』と曼荼羅の羅睺と計都の図をあげておく。頭の蛇は、宇賀弁才天と通ずるものがある。(図9, 10)

『宿曜經』の訳者は不空である。矢野道雄は、「訳者というよりも著者」であるとさえ述べている。弁才天五部經のうち、四經が不空の訳と称せられている。弁才天と宿曜道とは深いむすびつきがあることをうかがわせる。

阿修羅との戦いに勝った弁才天が、阿修羅の儀軌をとりこんだとしても、不思議ではない。『最勝王經』大弁才天女品でも、「彼の人のあらゆる悪星の災変、初生時に与えし星属の相違」を除滅して、「四方の星辰及び日月、威神もて擁護し」と、星にまつわる弁才天の力が見出せる。

善興寺の天孫神が弁才天であるなら、左右の手に執る日と月は、あるいは羅睺阿修羅王と関連して、日食と月食と起こさせる力、ないし、日食と月食とを速やかに復元させる力を示しているのかもしれない。



図9 『梵天火羅九曜』の羅睺星(上)
と計都星(下)



図10 『御室版両部曼荼羅』の羅睺星
(上)と計都星(下)



10. 三 鏡

天孫神を弁才天とするには、三面六臂と一面八臂のちがいがあり、ためられる。視点をかえて、三面六臂とは、三つの尊像がひとつになっただけのことだ、とすると、陰陽道の三鏡の例があって納得できる。安部清明撰と称する『三国相伝陰陽輶轄簠簋内伝金烏玉兔集』（以下、簠簋内伝とよぶ）巻一の最終が「三鏡」である。

| | | | | | |
|----|------------|----|------------|----|------------|
| 正七 | 乙辛乾 坤巽艮 | 二八 | 甲丙庚 壬乾巽 | 三九 | 乙丙丁 乾壬癸 |
| 四十 | 丁癸乾 坤巽艮 | 五霜 | 甲丙庚 壬坤艮 | 六雪 | 甲乙丁 庚辛癸 |

右此の三鏡は、日月星の三光、天人地の三才、法報応の三身、阿鐔呷の三字、佛部蓮華部金剛部の三部、理事智の大日、弥陀釈迦薬師の三尊、咤呾尼聖天辨財天の三天なり。春は大円鏡智、故に三弁宝珠形を以て礼拝す。三鏡三玉女は是なり。

と書かれている。

三玉女とは、天星玉女・色星玉女・多願玉女の三つの星である。この三つの星の方向は、歳徳神にも劣らないほどのよい方向をあらわしている。そして、たとえば、正月は、天星玉女は乙の方向、色星玉女は辛の方向、多願玉女は乾の方向に位置する。二月は、それぞれ、甲・丙・庚の方向に位置する。そして天星玉女の方は、「よろづ天道を祈るに吉」とされ、色星玉女の方は「色ある衣裳どもを仕立て着始むるに吉」とされ、多願玉女の方は「一切諸願満足の方」とされた。具注暦では、毎月のはじめに「三鏡」が注されていた。ところが、貞享以後の暦では、この吉方は示されずに、三宝宝珠形だけを暦首に図としておかれるだけとなった。仮名暦の暦首の三鏡をあげておく。更に三鏡では、九玉女をいう。つまり、天星玉女の方とは、天星玉女が表となっているが、他の二玉女は裏となって存在している、というのである。三つの玉女星の裏にそれぞれ他の二玉女星があるので、九玉女ということとなる。(図11, 12)

天孫神の尊容に三鏡の記事をあてはめる。天孫神は三鏡で、毎月、天星・色星・多願玉女のひとつが正面となり、他の二玉女は後になる。そして、正面の顔は弁才天、左面は荼吉尼天、右面は歓喜天(聖天)である。尊像が三つの星で、左右の手の日と月で三光である。日も月も雲の台座にすえられており、尊像の台座もまた雲である。三光すべて天体であるから、雲の台座なのであろう。弁才天は普通、毛織物の褥か、蓮の葉の上にすえられるのである。宝珠は、三鏡そのものが宝珠であるから、それを示しているとみてよい。右第三手の蛇は、絹索からたやすく変化しうるとしても、宇賀神または宇賀弁才天のシンボルとすれば、蛇のままでよい。羅喉星の頭上の蛇を連想すれば、羅喉星を支配している象徴とりたいのであるが、それではあまりにも個の好みに偏するきらいがあろう。

陰陽道の三鏡が、天孫神の尊容を理解する上で、なぜかしっかりと役立つようである。三鏡の三玉女が九玉女になる、という考

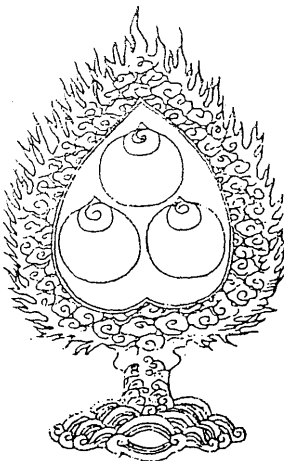


図11 三鏡宝珠形



図12 仮名暦の暦首に描かれた三鏡

え方は、どうやらわが国の神道には、ままたったことのようなのである。大林太良は『東アジアの王権神話』¹⁹⁾で、吉田敦彦の研究を紹介している。

吉田は結論する。「このように神話的祭祀的に水と深い関係を持ち、水女神の一面を有するという点においても、アマテラスは明らかに、〔イランの〕アナヘター＝〔インドの〕サラスヴァティー型の印欧語族の大女神格に類似している。」私も吉田の見解に賛成である。

ところが、わが国では貞享四年（1687）に潮音という僧が『佛説最勝護国宇賀耶頓得如意宝珠陀羅尼経略疏』で弁才天とアマテラスとの一致を説いている。ただし、三鏡と同様に複雑である。アマテラスとは、ヒルメムチ・ツクヨミ・ニニギの三尊一体をいい、それぞれに毘盧遮那・阿彌陀・釈迦牟尼を配し、また弁才天女・茶枳尼天女・赤精雨宝童子を配している。このような二重構造・三重構造は、弁才天の霊場の厳島でもみられる。伊都岐島二所皇大神は外宮の地御前と内宮の厳島から成る。その伊都伎嶋太神一所には三神六座が祀られていた。大御前は田心姫神二座で田心姫神と田霧姫命、中御前は市杵嶋姫命二座で市杵島姫命と瀛津島姫命、聖御前は湍津姫命二座で湍津姫命と湍津島姫命である。そして、これらの御神体は御船代といわれていた。これら神々の本地が弁才天であった。厳島では弁才天が三神六座となり、三鏡のような形をとっている。

11. 聞得大君御殿の神像

鎌倉芳太郎は『沖縄文化の遺宝』²³⁾で、野嵩御殿から聞いた聞得大君御殿の神壇の弁才天について記している。

神殿正面の神壇（床の間）には、壁面の中央に弁才天の掛物が掛っていた。その図様は中央に女神像、下に白馬、上に白鳥（鳳凰）、白鳥の向って左に御日、同じく右に御月が写されていた。

とある。白馬は聞得大君の乗馬である。白鳥は鳳凰ではなくて、孔雀かハンサ（鷺鳥に似た鳥）ではなかっただろうか。孔雀とハンサがサラスヴァティーの乗る鳥なのである（図13）。インドのサラスヴァティーは、若い美人で眉は新月、身は白色で白衣をつけ、白蓮の上に坐するというのが普通の尊容である。左右の日と月については、すでに記した。琉球国の最後の王の尚泰は、これを「弁才天とは考えられぬ」と言ったとのことであるが、尚泰自身がどれだけ弁才天

の儀軌に通じていたかは不明である。弁才天であつたのか、なかったのかについて、私の言い得ることは次は次の一言でしかない。「聞得大君が、弁才天のほかに、いかなる女神を拝むことができたというのか」。

12. 結 語

歴代の冊封使録から、琉球国を守護する神の記述を追ってみた。そして、汪楫の記した六臂で日月を執る神像に遭遇した。汪楫はそれを辦戈天と称した。弁才天を追ってゆくうちに、善興寺の天孫神の像にたどりついた。三面六臂で日と月を執るその像と、弁才天の像の尊容には、アジア各地のさまざまな神話や信仰、宿曜道や陰陽道などが交錯しているようであつた。そして、最近の神話学の成果とやらも、すでに古くから、弁才天の尊容に象徴されていたかに思われた。



図 13 ハンサに乗ったサラスバティー

〈文 献〉

- 1) 陳侃『使琉球録』（嘉靖 13 年 / 1534）。嘉靖刊本影印，華文書房（民国 57 年 / 1968）。原田禹雄訳注本，榕樹書林（平成 7 年 / 1995）。
- 2) 郭汝霖『使琉球録』（嘉靖 40 年 / 1561）。原田禹雄訳注本，榕樹書林（平成 12 年 / 2000）。
- 3) 蕭崇業『使琉球録』（万曆 7 年 / 1579）。万曆刊本影印，学生書局（民国 58 年 / 1969）。
- 4) 夏子陽『使琉球録』（万曆 34 年 / 1606）。万曆本寫本影印，学生書局（民国 58 年 / 1969）。原田禹雄訳注本，榕樹書林（平成 13 年 / 2001）。
- 5) 汪楫『使琉球雜録』（康熙 23 年 / 1648）。康熙刊本。原田禹雄訳注本，榕樹書林（平成 9 年 / 1997）。
- 6) 徐葆光『中山伝信録』（康熙 60 年 / 1721）。康熙刊本。原田禹雄訳注本，榕樹書林（平成 11 年 / 1999）。
- 7) 周煌『琉球国志略』（乾隆 22 年 / 1757）。乾隆刊本。平田嗣全訳注本，三一書房（昭和 52 年 / 1977）。原田禹雄訳注本，榕樹書林（平成 14 年 / 2002）。
- 8) 李鼎元『使琉球記』（嘉慶 7 年 / 1802）。嘉慶刊本。原田禹雄訳注本，言叢社（昭和 60 年 / 1985）。
- 9) 『琉球神道記』（慶安元年 / 1648）。横山重編集本，角川書店（昭和 45 年 / 1970）。原田禹雄訳注本，榕樹書林（平成 12 年 / 2000）。

琉球を守護する神（原田）

- 10) 毛起龍『思出草』（康熙 39 年 / 1700）。外間守善『混効験集』付録，角川書店（昭和 45 年 / 1970）。
- 11) 『混効験集』（康熙 50 年 / 1711）。池宮正治『混効験集の研究』第一書房（平成 7 年 / 1995）。
- 12) 『神道大系』神社編五二 沖縄，神道大系編纂会（昭和 57 年 / 1982）。
- 13) 横山重編『琉球史料叢書』東京美術（昭和 47 年 / 1972）。
- 14) 『那覇市史』『那覇の民俗』同編集室（昭和 54 年 / 1979）。
- 15) 『佛像解説』（国訳大蔵経），東方書院（昭和 5 年 / 1930）。
- 16) 田中義恭・星山晋也『目でみる仏像・天』東京美術（平成 3 年 / 1991）。
- 17) 錦織亮介『天部の仏像事典』東京美術（平成 5 年 / 1993）。
- 18) 白川静『中国の神話』中央公論社（昭和 50 年 / 1975）。
- 19) 大林太良『東アジアの王権神話』弘文堂（昭和 59 年 / 1984）。
- 20) 大田南畝『琉球年代記』（天保 3 年 / 1832）。『宝玲叢刊』第四集，本邦書籍（昭和 56 年 / 1981）。
- 21) 『山家要略記』『神道大系』天台神道下，神道大系編纂会（平成 4 年 / 1992）。
- 22) 矢野道雄『密教占星術』東京美術（昭和 61 年 / 1986）。
- 23) 鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』岩波書店（昭和 57 年 / 1982）。